韓国の葬送儀礼

――慶尚南道内谷里の事例――

小笠原　真

一

私は、日本学術振興会より、国際共同研究「西日本地域への韓国慶尚道移民及びその母村への再統合に関する研究」の日本側研究班――村落班（「村落構造と文化変容」を研究テーマとし、五人で構成）、移民班（「移民者の実態と文化変容」、二人）、医学班（「身体的適応と文化変容」、四人）、理論総括班（「共同研究の総括と理論研究」、二人）――のうちの、村落班の一員として、一九七四年九月二十日より十月九日までの二十日間、大韓民国慶尚南道陜川郡陜川面内谷里への出張を命ぜられる機会を得た。そこで、調査地内谷里の「村落構造と文化変容」を解明する過程で、入手した資料を用いて、ここに「韓国の葬送儀礼――慶尚南道内谷里の事例――」をまとめることにした。

二

先ず、調査地慶尚南道陜川郡陜川面内谷里を素描することから始めると、内谷里は、韓国第三の都市大邱市（人口一二〇万）の約八〇キロ西南に位置し、途中かなりの峠を二つも越えなければならないので、車でもたっぷり三時間はかかる山間村落であり、また、内谷里の北方二五キロほどのところには、韓国三大寺刹の一つであって、八一、二五八枚の木版大蔵経を保存する伽倻山海印寺がある。ところで、内谷里が属する慶尚南道は、朝鮮半島の最南端に位

置する道であって、道の二面が海に囲まれ、気候温暖のために（月別気温が最高気温月八月の月平均で二六度、最低気温月一月の月平均で零下二度）、稲作に適し、稲と麦の二毛作が可能な田園地帯であるが、因みにここで、一九七〇年十月現在の統計的な数字よりその点を窺ってみると、慶尚南道の総戸数五五四、七八七戸中、約六五％の三五九、八六二戸が農家であり、一戸平均七・四三反歩の耕地面積を所有し、主要農産物として、米・麦の外、いも・雑穀・豆類・ゴマ・とうがらし・綿花などを生産している。[1]

さて、内谷里は一九六〇年の時点で戸数約一一〇戸あったものが、近時の国の近代化に伴い、山間村落にありがちな過疎化の傾向を生じ、例えば一九七〇年には転出三戸、転入〇、七一年には転出三戸、転入一戸、七二年には転出三戸、転入一戸、七三年には転出四戸、転入〇、分家一戸といったように、戸数が減少し始めた。その結果、調査時点の七四年九月現在では、戸数八〇戸、総人口四五九人となっている。

次に、内谷里の家族構成を現住民簿に基づいて類別してみると、第一表及び第二表の如くなっている。即ち第一表が示すように、内谷里では一人家族と三人家族から九人家族までが分布しているが、そのうち五人家族が二三例（二八・八％）と断然多く、以下六人家族一六例（二〇・〇％）、七人家族一五例（一八・八％）、八人家族七例（八・五％）の順であって、一戸平均でも五・七四人と多く、その数字は一九六六年五月現在の韓国に於ける一戸平均人員五・一五人―農村のそれは五・三六人[2]――よりもいずれも上回っている。更に、第二表より明らかなように、家族類型では核家族が三八戸（四七・五％）、直系家族が三九戸（四八・七％）とほぼ相半ばしている。

第一表　家族の規模

家族員数（人）	戸数（戸）	％
1	3	3.8
2	0	0
3	5	6.3
4	6	7.5
5	23	28.8
6	16	20.0
7	15	18.8
8	7	8.5
9	5	6.3
10人以上	0	0
1戸平均 5.74人	80戸	100.0％

続いて、韓国の村落構造の一大特色であって、調査地内谷里もその範疇に含まれる同族村落について若干考察を加えておくと、先ず、同族村落というのは、それの研究者善生永助氏の説明によれば、同一祖先より出た同本同姓のも

のの一村落または一地方に集団住居するものを指す、といっているように、[3] 要するに、同族村落とは、同族戸口が多数一箇所に集まっている村落をいうのである。そして、このような同族村落が今日尚韓国には数多く実在するが、ここでは慶尚南道の同族村落数を昭和八年の時点で調べた結果を紹介すると、合計一、七五七もあり、そのうち陜川郡には一一七あり、内谷里もその一つに数えあげられている。[4] つまり、内谷里は約六〇〇年前に、慶州の江陽派李氏が移住して来て、この村を拓いたと伝えられているように、所謂江陽派李氏の同族村落である。具体的には第三表の李姓六八戸中六七戸までが江陽派李氏であり、更に他姓の徐、朴、全氏の各一戸は、今は主人が亡くなったために、妻の姓（韓国では女性は結婚しても、従来通り生家の姓を名乗るために、日本の夫婦のように必ずしも姓は一致しない）を名乗っているに過ぎず、いずれも主人が江陽派李氏であったところから、実質的には八〇戸中七〇戸までが江陽派李氏である同族村落と考えてよい。そして、江陽派李氏にあっても、更に分派が四〇余りあり、[5] 特に内谷里には、桂南斎契二七戸、光山斎契二六戸、一林亭契七戸、中宗契三戸がそれぞれ分派を形成している。

第二表　家族の類型

家族の類型	戸数(戸)	%
1　人　型	3	3.8
核家族型	38	47.5
直系家族型	39	48.7
計	80	100.0

第三表
内谷里の姓別戸数

姓別	戸数	%
李	68	85.0
金	4	5.0
申	2	2.5
徐	1	1.25
朴	1	1.25
全	1	1.25
姜	1	1.25
呉	1	1.25
南	1	1.25
計	80	100.00

ところで、周知の如く、韓国ではセマウル運動と名付けられた新しい村づくり運動（new village movement）が全国的に進められつつあり、今や村落構造が大きく変動しようとしている。つまり、一九七〇年にスタートしたセマウル運動は、七二年から本格化し、七三年には全国三四、六六五の全村が参加するに至った。そして、この運動の進め方及び仕組みは、村民が自らのリーダーを決め、政府に「セマウル」事業村としての申請をする。すると政府はこれを受けて、事業――㈠藁葺き屋根の瓦やスレートへの葺き替え、簡易水道、下水、集会所など共同施設、子供の遊び場づくりなどの生活環境改善、㈡農道、村道、橋の整備、治

山緑化、電化など生産基盤の整備、㈢園芸換金作物などの共同栽培、ヘリコプターなど機械力を使った農薬の共同散布、藁加工など農閑期利用のセマウル工場の建設、経営等――に必要な資金の援助や各種の相談に応ずる、といったようになっている。なお、セマウル運動村は運動の進展状況から、㈠主として生活環境改善に取り組み中の「基礎村」、㈡その段階を既に終えて生産基盤の整備に取り組み中の「自助村」、㈢既に前二段階の事業が所得増大となって実を結び始めた「自立村」、に三区分されている。[6] では、このように全国的に進められているセマウル運動を、内谷里の人々は如何に受けとめ、またそれをどのように展開させてきたであろうか。先ず、内谷里は一九七二年五月にセマウル運動村に指定された。そして、それを契機に、村の入口のバス停留所から内谷里の人家の大部分が建ち並ぶところまでの、徒歩で約七～八分の道路や橋が新たに五メートル巾の、所謂自動車も通行可能なものにつくりかえられたのをはじめ、電燈の設置、集会所、共同浴場、洗い場、有線放送施設などの拡充と設置など、続々と新しい村づくり運動が展開され、[7] 調査時点では、自助村の段階で生産基盤の整備に取り組み中であった。

三

さて、韓国の葬送儀礼を考察するに先立ち、ここで韓国の人々の宗教意識について、若干考察を加えておくことが必要であり、かつ正当な順序であろう。そこで先ず、各種宗教団体から報告された資料に基づいて、一九七一年現在の韓国の宗教・信徒数を示すと第四表のようである。[8] つまり、この表の教えるところは、第一に、信徒数合計一七、九五八、〇〇〇人という数字は、韓国の全人口が一九七〇年十月現在三一、四六九、一三二人であるところから、単純な計算をすれば、二人に一人の割合で宗教を持っていることと、第二に、韓国の三大宗教が仏教、儒教、キリスト教

第四表
韓国の宗教・信徒数
（1971年現在）

宗教		信徒数（人）
仏教		7,100,648
儒教		4,423,000
キリスト教	旧教	790,367
	新教	3,217,996
天道教		637,000
太宗教		114,000
その他		1,674,989
計		17,958,000

（注） 資料出所『日本語版韓国年鑑』（1973年版）109～111頁より作製

（新教）であること、である。では次に、韓国三大宗教のうち、信徒数で全人口の二割強を占めて断然一位である仏教からみていくと、現在の仏教は曹溪宗、禅寂宗、涅槃宗、戒律宗、法相宗、法性宗など十六宗派あり、そのうち最大の宗派は曹溪宗で五〇〇万人の信徒を擁している。次いで、信徒数では第二位にあるとはいえ、実質的にはそれよりはるかに大きな影響力を有している儒教についてみると、韓国では儒教は朱子学一点張りで、特に李朝時代（西暦一三九二年～一九一〇年）に崇儒排仏の旗標の下、国教と定められたために、黄金時代を迎えるようになった。したがって、儒教・朱子学は政治生活（官吏登用試験では、特に儒教に通じた人だけを選んだ）、精神生活ばかりでなく、広く一般の人々の日常生活にまでも強い影響を及ぼしてきた。そして、それは今なお韓国の人々の生活を大きく支配している。それ故、秋葉隆氏の如きも、韓国社会の伝統的構造を以って、巫覡道の生地に儒教の衣を着せたものといっても、甚しき過言ではあるまいと述べ、更に、その信仰の度合も男女によって別れている状態であって、つまり、男性は儒教的儀礼によって、また女性は巫俗的儀礼によって、それぞれその信仰心を満たしている、とさえ主張している。[9] 続いて、信徒数で全人口の一割強の三二二万人を擁して、第三位にあるキリスト教（新教）についてみると、今日の隆盛は、一口でいえば、固く閉ざされた鎖国主義の門戸が一八八〇年に開かれ、キリスト教に対する迫害が中止されると、各国から各派の宣教師が続々入ってきて、布教に努めた結果である。かくして、一九七一年十一月末現在、教会数で一三、〇三七もあり、ソウル、釜山、大邱などの大都市はもとより、ソウルから大邱へのセマウル号での汽車の旅で、車窓にみる村落にも、到る処教会の塔が平屋の民家の中に高く聳えている光景は、私の心にも強く印象に残った。なお、これらの教会は、長老派のものあり、メソジスト派に属するものあり、あるいはバプチスト派のものありといったように、六〇以上の分派のものである。

四

先ず、韓国の人々の伝統的な世界観及び霊魂観について考えてみると、民間では、雑鬼（邪鬼）がさまようイソン（「この世」）と、死霊が行くジョソン（「あの世」）との二元的なものが基盤になっているようである。そして、この世をさまよって祟ったり意地悪をする雑鬼に対しては、所謂ムーダンと呼ばれる巫女やパンスという盲覡の専門祈禱

者がいて、祈りをする。これに対して、死んでから行くあの世は「先祖の国」ともいい、死即帰であって、通常死は、たんに人間の体から魂が「先祖の国」へ帰るというふうに解されている。しかしながら、ここで注意しておきたいことは、韓国では死者の魂がすべて無条件にかつ速かに「あの世」へ行けるとは考えていないということである。別言すれば、死に方が問題であり、「あの世」へ行ける死に方は長寿を全うして自然死した場合のみであって、不幸にして病死した場合とか、陸上や海上で事故にあって死んだ場合とか、娘が嫁に行かずに死んだ場合とか、更には恨みや望みを残したまま自殺した場合などの、つまり早死した場合などには、残念ながら「あの世」へは行けないのである。[10] それ故、こうした死霊はこの世をさまよって祟るところから、例えば内谷里では、若い男女が婚約中に一方が突然病死した場合などに、死んだ霊魂との結婚式をあげる風習がみられるのである。これをホンキョラェ（「魂結礼」）と称する。

では、このような霊魂観と他界観とをもった韓国の人々にあっては、葬送儀礼がどのように行なわれているであろうか。つまり、本稿での主要テーマを慶尚南道陜川郡陜川面内谷里の事例を通して、以下幾分具体的に分析して行くことにしよう。

さて、内谷里では葬送儀礼がどのように行なわれているかを、古老の一人に尋ねたところ、即座に青山白雲鶴監修『家庭秘訣全書』を取り出し、前節で既述した韓国の三大宗教に照準を合わせて、明らかに作成されたと思われる一般葬礼（＝儒教式葬礼）、仏教式葬礼、基督教式葬礼の三種の式次が、掲載されている第五表を示しつつ、[11] 内谷里のそれは一般葬礼といわれるきわめて煩瑣な儒教式葬礼であるとして、以下のような説明を加えてくれた。

即ち先ず、きわめて煩瑣な儒教式葬式が行なわれるのは、既婚した成人が死去した時のみであって、未婚の者が死んだ場合には原則として葬式を行なわない点に、止目しておきたい。つまり、内谷里では、二～三才までの乳児の場合には、布袋に入れて簡単にほうむってしまうし、また四才以上の未婚者の場合でも、木棺に入れて埋葬するだけで、特別葬式は行なわない。それ故、ここでは最も盛大に行なわれる父母の葬儀を中心に述べることにする。

㈠　収尸

ここに一人の老父若しくは老母あり、臨終が近づくと、清水ないしは重湯を二、三匙飲ませる。やがて息を引き取ると、死者の顔や手足を拭き、身体を平坦にのばし、手を

揃えて腹の上に組ませ、足を揃えてしばり、屍体の全身を麻布でまき、しかも死後の体が硬直しないように、その死相姿勢をたもたせて、七星板と称する木版の上に、頭を北向きにして寝かせる。そして、屏風でそれを囲む。次いで、家の空地に板を置き、その上に土器を七個置き、その中に供物を入れ、一器の傍には更に草鞋を一足揃える。これには幽界から死者の霊魂を引取りにくる使者を接待する意味が含まれている。なお尸（し）――遺体が床にある間を尸といい、棺の中に入れられてからは柩という[12]――のある間、室内に猫が入るのを特に恐れるのは日本と同じである。

第五表　韓国における葬礼節次表

一般葬礼（儒教式葬礼）	仏教的葬礼	基督教式葬礼
一、収　尸	一、五方幡	一、収　尸
二、皐　復（招魂）	二、無常戒	二、永訣式
三、発　喪	三、削　髪	①式辞　②讃頌　③祈禱
四、襲　殮	四、沐　浴	④聖経朗読　⑤詩篇教説
①飯含	五、洗　手	⑥聖経朗読　⑦説教
②小殮	六、洗　足	⑧祈禱　⑨略歳報告
③大殮	七、着　裾	⑩弔文、弔辭、弔電
五、霊　座	八、着　衣	⑪弔歌　⑫主祈禱文
六、成　服	九、着　冠	⑬出棺
七、永　訣	十、正　座	三、下棺式
八、発　靷（出棺）	十一、施　食	①讃頌　②祈禱
九、穿　壙	十二、入　龕	③聖経朗読　④宣告
十、返　虞	十三、起　龕	⑤祈禱　⑥主祈禱文
	十四、火　葬（埋葬）	⑦祝禱
	十五、唱　衣	

（注）　資料出所、青山白雲鶴監修『家庭秘訣全書』93頁

㈡　皐（こう）復（招魂）

ところが、韓国では、収尸が終わると他方で、一人の男が死者の平生着ていた着物をもって、庭の真中に立ち、大声で三度名前を呼び、着物を打ち振りながら屋根の上に投げる儀式もみられる。これを皐復とか招魂といい、一種の死者の霊魂を呼び戻す式であると韓国の人々は考えている。[13]そして、かかる儀式を生んだ背景には、死後の霊魂は肉体から遊離するが、しばらくの間はあまり遠くに去らずに肉体の近くをさまよっていると信じ、そこで、その間に、死者の霊魂を呼び戻して、元の肉体に納めて蘇らせたいという肉親の痛切な願いがあると思われる。

㈢　発喪

招魂の儀式が済むと、今度は発喪といって、確かに某家では某氏が亡くなったということを発表すると共に、遠方

の親戚知人へは「訃告」といって、死亡日時、葬式の日時、場所を明記したものを送る。すると訃を受けた者は死者の家に直接出掛けて悔みの言葉を述べたり、あるいは遠方の場合には慰状を送り返したりする。

(四)　襲殮

次いで、襲殮とは一口でいえば遺体をきれいに洗って服を着せ納棺することである。つまり、葬式の前夜、遺家族は故人の死体を、昔は楠木の葉の入った水、現在ではアルコールで濡らした手拭いを用いて体全体をきれいに拭く。それから、近親者は死者の爪を入念に剪り、髭を剃り、頭髪を洗って特に婦人の場合には束ねる。更に女性の場合には、その娘が母親を白粉や口紅で化粧をする。殮には小殮と大殮とがあって、前者は衣服を死衣――死衣は白色で絹製もしくは麻製のものを用い、これの縫い方は糸の結び目をこしらえず、打合わせを生前のものとは反対にする――と取り替えるのを指し、普通二日目に行なう。なお、小殮が済んだ後、喪主となる人が、人の口に米を二～三粒くわえさせる。これを飯含と称し、三回にわかって行なう。後者の大殮は、面帽、脚絆、鞋等で死者の顔、首、手、足等を飾りたて、死後の旅路への用意をすることであって、普通三日目に行なうが、これは更に納棺（入棺）をも伴う。ところで、納棺の時は生前故人が好んだ衣服や書籍その他のものを入れて棺の蓋をする。なお、韓国では棺は長方形の寝棺であって、その材料として、今では松の木を用いるのが一般的であるが、昔は人によっては桐、欅などの良材を生前から板にして用意しておいて、いざの時にはそれを用いて棺をつくることがしばしばあった。

(五)　霊座

大殮が終わったら、直ちに棺を祭祀する部屋に奉って、その前に帷帳をはり、亡き人の御霊を祭るところ――これを霊座と称する――をつくる。

(六)　成服

納棺の翌日までに所定の喪服――韓国には儒教思想の影響を受けた「喪服の制」という非常に厳密な規定があり、家族間における親疎尊卑の差等に応じて、その期間と服装とにいくつもの段階を設け、それによって整然たる喪服の体系を構成している――が出来あがると、妻子近親者はそれを着用して、魚肉、酒、餅などの供物をそなえ、死者に対して悲しみの情を表わす「哭」を行なう。これを俗に「成服奠」と称する。

(七)　永訣

永訣は、いよいよ最後、亡き人をあの世へ送る告別式で

ある。これは以前にあっては発靷（出棺）する前日の朝、原則として行なうことになっていたが、今では発靷の直前に喪家あるいは斎場で行なうようになってきた。そして、永訣式の次第は、喪主以下弔客一同が霊座の前に参列し、喪主が香をたき二度お辞儀をし、出発を黙告する、以下親族、弔客の順に焼香拝礼して退出する。なお、現在韓国で行なわれている葬送は、中国のそれを真似たと考えられる三日葬、五日葬、七日葬といったように、奇数日葬式を原則としている。[14]

（八）発靷（出棺）

例えば、喪家で永訣式が行なわれた場合、それが終ると、霊柩を安置する部屋の入口の戸がはずされ、棺が戸外に出される。出棺の時にも「哭」といって、酒を供え、香をたき、近親者一同が号泣し、最後の別れの哭をする。特に親の場合には「アイゴー、アイゴー」といって号泣する。なお、出棺の行列には、女性はその夫以外決して加わらぬ仕来りになっているので、棺に取りすがって泣き悲しむ。柩輿にのせられた棺は「輿丁」という人々によって担がれ――内谷里では現在二四人、一八人、一六人の三通りの担ぎ方が採用されているが、いうまでもなく、二四人で担ぐ方法が最も丁寧である――、その後に喪主、近親、親族などが列をなして続く。

（九）穿壙（せんこう）

一方、埋葬地では棺を葬る仕度をする。ところが、韓国では風水的効果、即ち父母の亡くなった後の陰宅＝墓地を、いい場所に選べば、亡き父母にも孝行出来ると同時に、子孫も繁栄するという信仰があるところから、墓地の選択にあたっても「地士」と呼ばれる一種の鑑定人がいて、その人が死者の生年月日、時刻、死亡日時、方角、干支などを総合的に判断して、「ここの場所を墓に」と決めるのである。[15]すると全員がその人の指示に従い、人夫が墓穴を掘るのである。棺が墓地に着くと、そこへ棺のまま埋める。このように、韓国では埋葬が支配的であって、一九七一年現在八五％と普及し、火葬が僅かに一五％である[16]のに対して、日本では逆に火葬が一九七〇年現在七九・二％と普及している点で、[17]両国の間には大きな差異がある。なお、韓国では土葬の時、先ず喪主がシャベルを用いず、喪服の袂で土をかける。そして近親者の順に土をかけるが、しかし親族は土をかけない。土葬の仕上げつまり土饅頭をつくることと、後片付けとは人夫に御願いして、神位（位牌）を持った人が先頭になって帰路につく。なお、帰路は日本のように往路と異なることはない。さて、いよいよ帰

って来ると、家に残っている婦女子一同が出迎える。そして、約二〜三分間「哭」をする。それが済むと一同に食事を出す。この食事には肉も出すし酒も出す。

(十) 返虞

さて、埋葬後の祭りには、初、再、三虞祭があり、初虞祭は別名返虞祭ともいわれ、これは葬式当日霊座の前で行なわれる。すなわち、虞は安神を意味するが、すでに真の魂は「あの世」に入り、死者は神位（位牌）となって、わが家に帰ってきたのであるから、新たな気分をもって神を迎え、これを安んぜしむるために返虞祭を行なうのである。式は喪主が焼香し、二度お辞儀をし、祝文を告げ、神位のある霊座に安住せられることを黙禱する。以下、家族、同族の者が一回拝礼して終わる。同様に葬式の翌日「再虞祭」を行ない、三日目には「三虞祭」を行なう。

ここで、順序からいっても、韓国の一般的な祖先祭について、幾分付言しておかなければならないであろう。そこで先ず、韓国には、さきにみたような墓地風水説があり、加えて、死んだ祖先は子孫である男子の供養を受けないと、飢え、迷い、墓地から出て来て、一門の子孫や村人達に災難をまき散らすという俗信があるために、昔から極めて丁重に祖先祭が行なわれてきたのである。つまり具体的には、祖先祭にも、儒教的同族思想の影響が強くあらわれ、主人の四代祖までの祖先、即ち父母（一代祖——韓国では日本と異なり自己から遡って祖先の代数を数える点に注意されたい[18]——）、祖父母（二代祖）、曾祖父母（三代祖）、高祖父母（四代祖）の神位（位牌）をまつる「家廟の祭」（これを「家祭」ともいう）と、五代祖以上のものは神位を墓前に埋めてしまうから、墓で行なう「墓地の祭」（これを「墓祭」とも「時祭」とも称する）とがある。先ず、「家廟の祭」を行なう時期は、一般に卒哭祭（死後一〇〇日目）・小祥（死後一年目）・大祥（死後三年目）・正朝（陰暦正月一日）・寒食日（冬至より一〇五日目）・端午・秋夕（陰暦八月十五日のお盆）の四名節などであり、なかでも小祥、大祥祭が最も重要視される。なお、韓国では、死後三年間は喪庁というのを家の中に設け、毎朝晩御飯などの供物をそなえる。そして三年が過ぎると、臨時の喪庁は廃止され、神位を祠堂に安置する。祠堂がない家では、喪庁を廃するだけで終わる。しかし、三年が過ぎても、毎年死亡した前日の夜に供物をそなえ、祭祀を行なう。これを忌祭という。次に「墓地の祭」は内谷里では特に秋に二回にわたって行なわれる。つまり、陰暦の十月一日には十代祖以上、同十五日の「下元」の前後の吉日には五代祖以上九

代祖までの墓祭が、遠近の同族が多数集まって墓前で行なわれる。そしてなかには百人以上の子孫が集まる例が内谷里でもあり、そこには今なお同族結合の密度が濃厚にみられる。しかしながらここで注意しておきたいことは、かかる韓国の祖先祭に近親者相会することが多いが、しかし主として男子のみであり、姻族接触の機会も乏しいということである。[19]

このように、韓国の祖先祭は「家廟の祭」と「墓地の祭」とに二分され、伝統的な儒教思想に支えられて極めて重要な行事とされているが、[20]ここで祖先の祭祀権の問題を取り上げて、この節を終えることにしよう。先ず、祭祀権は韓国では必ずその息子によってのみ継承される。そして、その継承者は長男である。つまり、長男は次男より先に生まれたので、先に生まれた者が後に生まれた者より祖先に近く、祖先に近い者が祖先の神位を祭るものとされるわけである。[21]ところで、韓国の農村家族に於ける近年の現象として、土地を子女に相続させるよりも、むしろ教育を多く受けさせて、農民の苦しい生活を免れさせ、都会へ進出させようとする傾向が出てきた。かくして、長男が他出する割合が近年になるほど高くなってきた。しかし、両親の死亡した後の祭祀は、他所で生活していようと長男が継承するのである。[22]要するに、韓国では家督相続に祭祀相続、財産相続、及び戸主相続の三種があるが、祭祀を相続する者は同時に戸主であり、死者の遺産の大部分を継承するに反して、戸主となる者は必ずしも祭祀の継承者ではなく、遺産を継承する者もまた必ずしも祭祀の継承者ではない。かくして、一家の系統は祭祀相続者によって連続し、戸主及び遺産の相続をする女子といえども、これを家系の世代に加えず、如何なる場合にも女子の祭祀相続を認めないのである。[23]つまり結論的にいえば、韓国に於ける家族構造原理では、祭祀権を第一条件とし、家督権を第二条件、そして財産権を第三条件としているのに対して、日本の直系家族の構造原理に於いては、家長権を第一条件とし、財産権を第二条件、そして祭祀権を第三条件としている点で、両国では大いに異なるのである。[24]

五

以上考察してきたところからも明らかなように、韓国に於ける一般的な葬送儀礼は、極めて煩瑣かつ丁重なものであったが、因みにここで、内谷里に於ける儀式・祭祀に示された交際圏の実態を、死んだ日から三年目の大祥祭までに、葬式・祭祀に参列した者を記述した「慰問録」を手

第六表　内谷里の葬式・祭祀に示された交際圏

地区別	実数（人）
内谷里内	4（他姓のみ）同族は全部
陜川面内他村落	100
郡内	226
道内他部	16
他道	20
計	366

掛りに解明してみよう。先ず、この「慰問録」は内谷里が既に第二節で述べたように同族村落であるところから、李氏一族の中より選ぶと共に、今より十五年前に亡くなった人の場合である。次に、この「慰問録」に記載されている氏名を地区別に整理したものが第六表であり、それによると内谷里の同族はいうまでもなく、村内の他姓の者も四人参列し、村外の各地からも三六二名にのぼる人々が葬式・祭祀に参列していることが看取される。[23]そして、このような多数の人々に食事・酒類を持て成せば、莫大な費用がかかるわけである。しかも、このことはたんに同族結合が強い内谷里のみに限ったことではなく、広く韓国中で行なわれていることである。それ故、ある報道は一九七一年八月七日付で、「韓国の葬礼費は一人平均八万円で、年二四〇億を消費し、国民総生産額の一%に達する」と伝え、[24]また作家の金達寿氏の如きも「祖神を敬い、死人を祭るのもよい。しかしながら、そのために生きているものがギセイとなるというのでは、当然これは考えなくてはならぬことであろう。」と主張し、[25]更に、最近のセマウル運動も冠婚葬祭の簡素化を唱え、内谷里の集会所にも諸行事の合理化の一つとして、冠婚葬祭の簡素化を記載した張り紙を掲げている。しかしながら、現時点では、内谷里はもとより韓国に於ける葬送の意識や儀式内容は容易に改まっていない。換言すれば、韓国には「昔の法を変えもするな、新しい法を出しもするな」という諺があるが、それが今なお生きていて、祖法が忠実に遵守されている。

註

① 韓国年鑑編集委員会編『最新日本語版韓国年鑑』（一九七三年版）、一九七三年、日韓経済新聞社、一三一頁。

② 中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』昭和四十八年、東京大学出版会、一八頁参照。

③ 善生永助著『朝鮮の姓氏と同族部落』昭和十七年、刀江書院、一九頁。

④ 同、二五八頁。

⑤ 同、二四九～二五〇頁。

⑥ 佐藤早苗著『誰も書かなかった韓国――近くて遠い隣人たちの素顔――』昭和四十九年、サンケイ新聞社出版局、一二九～一三一頁、及び『日本経済新聞』昭和四十九年八月十五日付「韓国特集――セマウル運動」参照。

⑦ 八木佐市「村落構造と文化変容――内谷里の場合――」

『韓国人移民に関する文化変容の研究――慶尚南道陜川面内谷里の調査――』昭和四十九年、高橋謄写堂、一一頁参照。

⑧ 韓国年鑑編集委員会編、前掲書、一〇九～一一一頁。

⑨ 秋葉隆著『朝鮮民俗誌』昭和二十九年、六三書院、八～一五五頁。

⑩ 萩原秀三郎・崔仁鶴著『韓国の民俗』昭和四十九年、第一法規出版、二一〇～二一一頁参照。

⑪ 青山白雲鶴監修『家庭秘訣全書』一九六九年、話題社、九三頁。

⑫ 韓東亀編著『韓国の冠婚葬祭――民俗学上よりみた今と昔――』昭和四十八年、国書刊行会、二八三頁参照。

⑬ 朝鮮総督府編『朝鮮の風習』大正十四年、朝鮮印刷株式会社、二〇頁参照。

⑭ 今村鞆著『朝鮮風俗集』大正三年、ウツボヤ書籍店、六四頁参照。

⑮ 中村道太郎編『改訂版日本地理風俗大系』（朝鮮地方）、昭和十二年、誠文堂新光社、一三一頁参照。なお、墓地は祖先の遺骸を生気に浴せしめるに適した地を吉とするが、この吉地は一般的にいって、玄武（北）の山が高く、青龍（左）、白虎（右）の山が明党（墓地の前の平地）を抱擁し、朱雀（南）に有情の水があり、従属の役を勤める案山が揃っており、その方向が五行の相生をなすものという、難しい条件を具えたものでなければならない。

⑯ 韓東亀編著、前掲書、三三四頁参照。

⑰ 鯖田豊之著『文明と風土』昭和四十九年、日本経済新聞社、一四〇頁参照。

⑱ 中根千枝編、前掲書、一三二頁、及び秋葉隆著、前掲書、一三七～一三八頁参照。

⑲ 鈴木栄太郎著『朝鮮農村社会の研究』（鈴木栄太郎著作集Ⅴ）昭和四十八年、未来社、三七五頁参照。

⑳ ソウル大学校行政大学院に於ける金曾漠教授の「韓国家族制度意識調査」によっても、祖先の祭祀をなすべきだとする者は七二・二％にのぼっている。（崔龍基「東洋社会の家族観、韓国――とくに儒教的家族思想の変遷とその社会的意義――」『講座家族』第八巻、青山道夫他編、昭和四十九年、弘文堂、三四三頁参照。）

㉑ 中根千枝編、前掲書、三三頁参照。

㉒ 同、五九～六〇頁参照。

㉓ 秋葉隆著、前掲書、一四〇頁参照。

㉔ 中根千枝編、前掲書、三四頁参照。

㉕ 八木佐市・平田順治・小笠原真「村落構造と文化変容――内谷里の第二次中間報告――」『韓国人移民に関する文化変容の研究（2）』昭和五十年、高橋謄写堂、一四～一五頁。

㉖ 韓東亀編著、前掲書、三三三頁参照。

㉗ 金達寿著『朝鮮――民族・歴史・文化――』昭和三十三年、岩波書店、二九頁。

〔附記〕　本稿は、昭和四十九年度、日本学術振興会より研究費の交付を受けて実施された調査研究で得られた成果の一部である。なお、かかる研究の機会を与えて下さった広島大学政経学部教授八木佐市先生には、末筆乍ら心から御礼を申し上げたい。

――一九七五・九・二五――

（本学講師　社会学）